# 26［随筆］『先生お久しぶりです』

　　良寛にまりをつかせん

　大正三年（一九一四）につくられたの句である。

　さして面白い句ではない。もともとが良寛の歌に想を得てつくられたもの。が、句の裏の小さな出来事を知ると、①深い想いがこめられていることに改めて感心させられる。

　つまり大正三年といえば、漱石が手に入れたいとずっと念願していた良寛詩集を目出たく入手した年なのである。その年の一月十八日のの山崎良平宛てのａショカンがある。

　「拝啓　良寛詩集一部御送り下されに落手御厚意深く候の詩はまことに高きものにて　古来の詩人中その少なきものと候えども　などはで頓着なきやにも被存候がにや　しこの道にくらき小生故しかと致した事は解らず候えば　日本人として小生はその字句のｂミョウをして満足候……」

　さらに良寛の書にもふれて、何とかそのが欲しいから探し求めてほしいなどと申しでている。の人なら Ａあるいは可能とでも思ったのであろう。

　かくもこの年になって漱石は良寛に入れ込んだ。その詩の気品に打たれるとともに、平仄などに頓着していない詩風に驚嘆の眼を見張っている。その詩集をやっと手に入れることが出来たのである。そのはずんだような喜びが句にはある。縁側にぼっこをしつつ日がな一日、良寛の詩を楽しんで味わっている漱石の姿が句の背後から浮かんでこないでもない。

　漱石が良寛と初めて出会ったのは、明治も末年のことらしい。上野博物館でその書を見て、あまりの素晴らしさに絶句した。一緒にいた津田が書いている。

　「最後の部屋に良寛の六曲が一双あった。先生はをにつけて『』と感嘆の一言を発せられた。そして『これなら頭が下がる』と言われた。私は先生のその言に②頭が下がった。寂厳、白隠、慈雲など有名だったが、単調で一本調子だった」

　別の青楓の回想では、これは草書で漢詩が屛風にいっぱい書いてあったもので、「スバラしいものだな」と漱石が嘆声をらし、そして漱石は……と青楓は説明する。

　「それからというものは良寛の字に魅せられた。あんな字がなんとかして書けるようにならぬものかと、寝ても醒めても頭からはなれることはなかった。良寛の字とえば、ミミズのように只うねうねとひからびた土の上でミミズがのたうっているようにそのリズミカルな面白さが魅力で、自分も一つああ云う風な字を書いてみたいと早速手習いを始めた」

　事実、明治末から大正に入ってからの、ということは晩年の漱石の書は見事なほどに良寛ばりになっている。ほっそりとした線から生まれでる清潔感、丁寧で、せず、淡々としながらユーモラスな雰囲気を漂わせる。専門の書家とは無縁の清純、清潔、孤高、孤立の書、良寛と漱石の書の出会いは決して異次元の世界のそれではなかった。

　こうなるともう漱石先生はＢない子供のように、命のｃセンタクをするためにも、良寛の書の実物が欲しくてらなくなる。最晩年に苦心してやっと手に入れる。それを早速にも床の間に飾ったものであろうか、野上豊一郎宛て大正五年四月十二日付の手紙で喜びを書き送っている。

　「……小生も良寛の書を二幅程内一幅は小品なれど大変結構の出来に候　今度心越禅師を拝見のを以て高覧に供えるべく候」

　念のために書くけれど、いまでこそ良寛の書は最高の評価を得ているが、当時は一般にはそれほど認められていなかったのである。漱石先生の眼識の高さに脱帽するほかはない。

　漱石の漢詩の一に大正五年九月十三日につくった「無題」がある。その後半の四はこう詠まれている。

　「天下何んぞ狂せるや筆を投じて起つ　人間道あり身をしてく　まさに死すべきの処に吾まさに死すべし　一日は元来十二時」

　当時の漱石にとっては、西洋文明にされＣやみくもにｄセッシュすることに狂奔する日本人、そして東海の君子国といわれるこの国はいまや正道を失い、「何んぞ狂せる」と見えたのである。物質的進歩を第一義とする近代化のなかの、人間の心の問題を、日本と西洋との出会いを通してとらえ、自分の生き方と重ねあわせて悩みつつｅカクトウした人、それが晩年の漱石である。

　漱石は良寛の詩や書をとおして、上人のな人間性のうちからみ出る高い気品に打たれた。いらざる技巧を超えた天衣無縫の風韻にあこがれた。利害損得の汗を流し去った爽快さのうちに、寂静無為の境にゆったりと遊べる、それこそがを離れた良寛の郷である。それは漱石が若いときより憧れつづけてきた“白雲境”といってもいいか。

　しかし、そこの住人になり得ぬままに漱石は大正五年十二月九日に逝った。直前の十一月十九日、詩をつくっている。それはつぎの一行ではじまっている。

　③「大愚難到志難成」（　到り難く　志　成り難し）

　大愚良寛が漱石の頭のなかを大きく占めていたに違いない。

●出題校

東北大学

●語　注

良寛＝江戸時代の禅僧、漢詩人（一七五八～一八三一）。越後（現在の新潟県）の生まれ。号は大愚。良寛には、「かすみ立つながき春日に子供らと手まりつきつつこの日暮らしつ」など、手まり遊びにちなんだ歌がある。

落手＝手に入れること。

平仄＝漢詩を作る時に守るべき音韻上の規則。

墨蹟＝書、特に日本で禅僧の筆跡について言う。

津田青楓＝画家、書家、随筆家（一八八〇～一九七八）。

寂厳、白隠、慈雲＝いずれも江戸時代の僧。

幅＝床の間、壁などに掛ける掛け物を数える語。

心越禅師＝中国の禅僧（一六三九～一六九六）。日本に渡来した。

風韻＝おもむきのあること。

■覚えておきたい語句

□13入れ込む………………熱中する。夢中になる。

□13頓着ない………………物事を気にしない。

□23嘆声……………………感心して上げる声。

□29弛緩……………………緩むこと。⇔緊張

□36高覧……………………相手が見ることの尊敬語。

□38脱帽する………………相手の力量や姿勢に感心し、敬意を表すること。

□46いらざる………………不必要な。よけいな。

◆漢字

　本文中の二重傍線部ａ～ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ［　　　］ｂ［　　　］

ｃ［　　　］ｄ［　　　］

ｅ［　　　］

問１　波線部Ａ～Ｃの語句の意味を次から選べ。　3点×3

Ａ　ア　または　　イ　当然　　　ウ　もしかすると

エ　十分に　　オ　どういうわけか

Ｂ　ア　未熟な　　イ　無鉄砲な　ウ　いい加減な

　　エ　無力な　　オ　聞き分けのない

Ｃ　ア　大量に　　イ　早急に　　ウ　だまされて

エ　脇目もふらず　　オ　思慮分別なく

〔　　　〕

問２　傍線部①とあるが、「深い想い」とはどのような心情を指しているか。本文の内容に即して三〇字以内で説明せよ。　10点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　傍線部②とあるが、なぜ「頭が下がった」のか。最も適当なものを次から選べ。　6点

ア　有名な書家の名前に惑わされず、良いと思うものに敬意を示す漱石の姿勢に心を打たれたから。

イ　有名な書家に負けないほど、漱石の書に対する知識は広く深いということを理解したから。

ウ　敬愛する漱石が、それほど有名ではない良寛などの書に感心する様子を見て、残念に思ったから。

エ　有名な書家の書に目もくれない漱石の様子を見て、よい書というものについての疑問に捕らわれたから。

オ　漱石の書に対する趣味が、自分とはずいぶん違っていることから、ずば抜けた才能を感じとったから。

〔　　　〕

問４　漱石にとって、良寛はどのような存在であったか。本文の内容に即して四〇字以内で説明せよ。　10点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　傍線部③とあるが、漱石の詩に込められた思いを、筆者はどのように解釈しているか。本文中の内容に即して、七五字以内で説明せよ。　15点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

【解答】

漢字　ａ書簡　ｂ妙　ｃ洗濯　ｄ摂取　ｅ格闘

問１　Ａ＝ウ　Ｂ＝オ　Ｃ＝オ

問２　念願の良寛詩集を入手し、その詩を楽しみ味わっている喜び。（28字）

問３　ア

問４　漱石が若いときから憧れつづけた「白雲境」ともいえる、塵界を離れた境地をもつ存在。（40字）

問５　漱石は、物質的進歩を第一義とする近代化のなかの人間の心の問題を自分の生き方と重ねて悩み、良寛の大愚に憧れつつも自身はその境地に至れないと考えた。（72字）

【読みのセオリー】

★随筆では、話題の変化・転換を読み取る

　随筆は、筆者の考えを論理的に述べた文章ではない。したがって、文章の展開が、連想でつながっていたり、場合によっては飛躍していたりする。ここでは、漱石と良寛の関わりを述べているという点では一貫しているが、その関わり方の違いに目を向けていく必要がある。

「良寛にまりをつかせん日永哉」という漱石の句から、良寛の詩を楽しむ漱石の姿を描き出す。それが良寛の書に「頭が下がる」漱石の姿となり、「白雲境」に遊ぶ良寛の姿への憧れへと展開していく。漱石は、詩や書への傾倒というだけでなく、良寛という存在に自らの生き方をも重ねてみているのである。

〔要　約〕

　「話題の提示→話題の発展→話題の転換」。この流れをつかむこと。このような展開では、筆者の主張は「話題の転換」部分にある。

　　　↓

　晩年の漱石は、良寛の詩や書に入れ込んでいた。近代化のなかの、人間の心の問題を、自分の生き方と重ねあわせて悩み、良寛のような寂静無為の白雲境に憧れたが、そこに至り得ない無念を死の直前の詩に残している。（99字）

〈筆者＆出典〉半藤一利（はんどう・かずとし）一九三〇（昭和５）年東京生まれ。作家、随筆家。東京大学文学部国文科卒業。『文藝春秋』編集長を長く務めた。近現代史、昭和史に関し、多くの著述がある。また、妻の母が夏目漱石の長女であり、漱石は義理の祖父にあたることから、漱石に関わった著述も多い。著書に『日本のいちばん長い日―決定版』『荷風さんの昭和』などがある。本文は、『漱石先生お久しぶりです』（平凡社、二〇〇三年）より。

☆「セオラム　補充問題」問題は次の３種類があります。

　＊差し替え　　　……　当該の問と差し替えるもの

　＊追加　　　　　……　同じ問いで追加された問題

　＊新問　　　　　……　追加が可能な新たな問題

新問

３行目「句の裏の小さな出来事」とは具体的にはどのようなことか。「こと」につながるように本文中から一五字以内で抜き出せ。

答　良寛詩集を目出たく入手した（こと）

新問

次の一文が入る直後の五字を答えよ。

念のために書くけど、いまでこそ良寛の書は最高の評価を得ているが、当時は一般にはそれほど認められていなかったのである。

答　漱石先生の